



もふもふと異世界で スローライフを目指します! 2

ALPHAPOLIS L I G H T

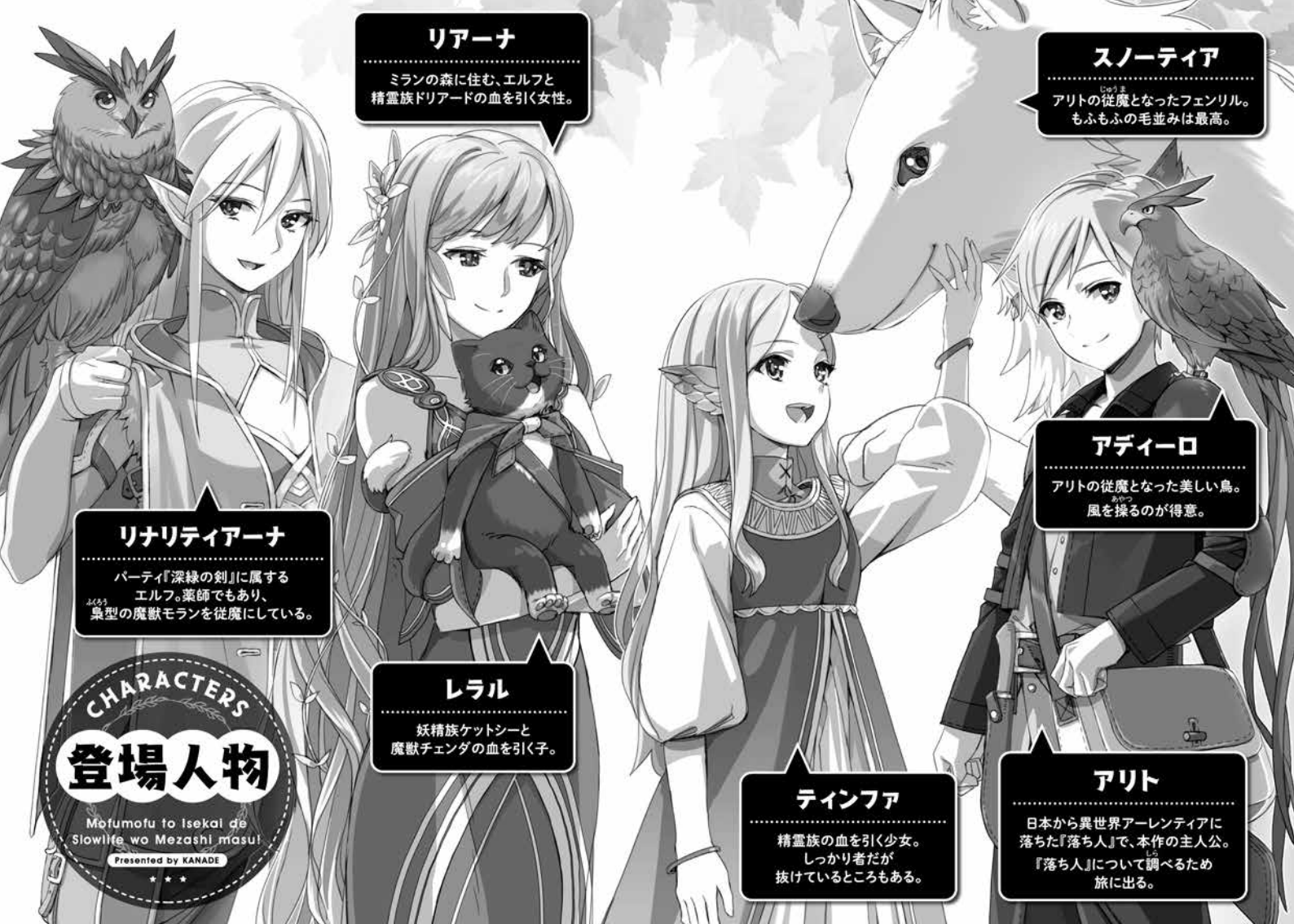
カナデ
Kanade

アルファライト文庫 

目次

第一章 ミランの森 7

第二章 エリンフォードの国
106



リアーナ

ミランの森に住む、エルフと
精霊族ドリアドの血を引く女性。

スノーティア

アリの^{じやうま}従魔となったフェンリル。
もふもふの毛並みは最高。

リナリティアーナ

パーティ「深緑の剣」に属する
エルフ。薬師でもあり、
^{みくら}鼻型の魔獣モランを従魔にしている。

アディーロ

アリの^{あやつ}従魔となった美しい鳥。
風を操るのが得意。

レラル

妖精族ケツシーと
魔獣チェンダの血を引く子。

ティンファ

精霊族の血を引く少女。
しっかり者だが
抜けているところもある。

アリト

日本から異世界アーレンティアに
落ちた「落ち人」で、本作の主人公。
「落ち人」について^{しよ}調べるため
旅に出る。

CHARACTERS

登場人物

Mofumofu to Isekai de
Slowlife wo Mezashi masu!

Presented by KANADE

第一章 ミランの森

第一話 ミランの森を目指して

俺、日比野有仁ひびのありひとは会社帰りに歩いている途中で突然地面の穴に落ち、日本からこの異世界、アーレンティアへとやって来た。

しかも、二十八歳だというのに見た目が十三歳くらいの少年となり、髪かみや目の色まで変化したのだ。

俺みたいに他の世界から来る人——『落ち人』は、決まって上級魔物や魔獣がうろつく辺境へんきょうの深い森に現れるらしい。かくいう俺も、大陸中央部にある『死の森』へ落ちた。

ただ、運良く落ちてすぐに森に住むエルフのオースト爺おすといいさんに拾われたため、無事だったのだ。

俺をいち早く見つけてくれたのは、オースト爺おすといいさんが連れていたフェンリルという魔獣まじゅう

の子供。その子供が、今は俺と契約を結んでる従魔スノーティア——スノーだ。他にも、俺には鳥型のアディーことアディーロという従魔がいる。

俺はオースト爺さんの家でお世話になりながら、この世界のことを学び、魔法や弓の修業を積んだ。

そうして二年の時が過ぎていくなかで、俺はあることに気づいた。

身長が変わらず、髪さえもほほ伸びなかったのだ。これは俺が『落ち人』であることが関係しているのかと思うのだが……。

そんな俺の悩みを察したオースト爺さんは、ちよつと強引だったものの、俺を旅に送り出してくれた。たくさんの道具とお金、それから爺さんの知人への紹介状とともに、『落ち人』のことを調べてくるといい、と俺の背中を押してくれたのだ。

そうして俺は、異世界を旅することになった。スノーやアディーと一緒に！

初めて訪れた大きな街を出たところで、討伐ギルドに属する『深緑の剣』という特級パーティの四人に出会う。リーダーのガリードさん、豹の獣人のノウロさん、エルフのリナリティアーナさん、魔法使いのミリアナさん。みんなクセはあるけど親切ないい人たちで、すっかり打ち解けた俺は、ナブリア国の王都にある彼らの拠点に滞在することになった。

それからナブリア国唯一の図書館で、『落ち人』の手がかりを探す日々が始まる。

なんとか手がかりを見つけれられたのは良かったが、美しい鳥のアディーが貴族の嫡男だという男に目をつけられてしまい……。

俺は騒動になる前に、図書館で掴んだ手がかりをもとに、急いで王都を出ることにした。目指すは北だ。オースト爺さんの知り合いがいる、ミランの森へ。

リナリティアーナさん——俺はリナさんと呼んでいる——が故郷であるエリンフォードに帰郷するというので、一緒に行くことになった。

俺の出発が突然だったため、準備が必要なりナさんとは後で合流すると約束して、王都を旅立ったのだった。

王都を出ると、街の外壁に夕日が遮られて薄暗く感じた。

日暮れが近いからか、これから門を出る旅人などほとんどいない。よほど急ぐ人か、宿の代金がなく野営をする人くらいだ。今も街道には人の姿はない。

俺たちは門を出ると、街道からすぐに逸れて街壁に沿って歩いた。

そして人目につかない場所でスノーに大きくなってもらい、その背に乗って一気に森まで駆け抜ける。

予想通りというか、やはり街道の先で昼間絡んできた貴族たちが待ち伏せしていたのだ。門を出る前に、アディーに頼んで偵察に飛んでもらい、それを知ることができた。

俺には従魔がいるのだから、街から出ればいくらでも逃げようがあるってわかりそうなものなのにな？

とりあえず今日は森の奥へとそのまま進み、日が完全に落ちたところで野営の準備を始めた。

「えへへ。スノー、アリトを乗せて思いっきり走れて気持ちよかったのー！」

「助かったよ、スノー。王都では窮屈な思いをさせてごめんな。ご飯を食べたらゆっくとブラッシングするからな！」

「やったー！ アリトと一緒にならどこでもいいけど、やっぱりお外だとのびのびするのー！」

スノーは『死の森』で自由に外を駆け回って育ったのだから、街中でじっとしているなんてつらかっただろう。

我慢させて悪いとは思っても、街中ではどうしてもスノーは目立つ。かといって、スノーを自由にするために手放すなんて、俺には絶対にできない。

だから街を出た今、スノーには好きなことをさせてあげたかった。

「よし。じゃあ今日は、スノーが好きな肉を出すからな！」

『わーい！』

尻尾をぶんぶん振っているスノーを微笑ましく思いながら、スノーとアディー用に『死

の森』の魔物の肉を取り出して竈の火であぶる。

その後、カバンから魔道具のコンロを出し、手早く自分の分のスープを作った。

スノーとアディーのご飯用の肉は全部、良質な魔力を多く含む『死の森』の魔物のものだ。

魔獣のご飯は栄養補給というよりも魔力を取り込む意味合いが強く、物質的な量よりも素材に含まれる魔力量が重要になる。

スノーとアディーは元々『死の森』にいた強い魔獣で、かなりの魔力量が必要だから、ここら辺にいる魔物の肉ではいくら食べても足りないだろう。

魔力で容量を拡張したカバンがなかったら、なかなか大変だっただろうな。まだ『死の森』を旅立った際に持ってきた肉も残っているけど、先日オースト爺さんに自作のマヨネーズを送ったら、お返しに、『死の森』の魔獣の肉を送ってくれたので助かった。

一緒に入っていた手紙には、『マヨネーズをもっと寄せ！！ こりやたまらん！ トンカツも入れろ！』って書いてあったぞ。ぶぶぶつ。予想通りというか、爺さんマヨラーになったな。

まあ、鳥を飼育している村か街を通りかかったら、卵を多めに仕入れて卵とマヨネーズを送ろうと思う。

他には、『貴族との関わりが煩わしかったら、もう一通の身分証明書を使え』と書いて

あったが……。

俺が森を出る時、爺さんは『アリト・ヒビノ』という名の証明書他に、『アリト・エ
ルグロード』という、爺さんの姓のものも用意してくれた。

きつと、俺たちが大きな街や王都に出ることで貴族とトラブルになる可能性を考えての
ことだろう。本当にありがたいよな。

思えば、王都ではガリードさんたちの家に居候^{いさう}させてもらい、貴族連中との面倒ごと
の後始末も任せ^{まか}せてしまった。

不思議だな。旅に出る時は、オースト爺さんの庇護^{ひご}がなくなるのだから、全^{すべ}て一人で
やっていかないといけない、この世界で自分を守るのは自分だけだ！ とか意気込んでい
た気がする。

でも今は、一人ではないと思えるのだ。俺を気にかけてくれる人がいるから。

爺さんの家にはその気になればいつでも帰れるし、ガリードさんたちの「頼^{たの}ましてくれて
いい」という言葉にも素直^{すな}に頷^{うなづ}けた。

そんなことを考えながら食事を終え、片付けも寝る準備も済んだら、次はスノーをもふ
もふする時間だ。

「スノー、気持ちいいかー？」

「うん、すつごく気持ちいいの！ もつとわしゃわしゃ、ゴシゴシして！」

「よし、ここかー？」

「きゃー！」

大きなサイズになって寝^ね転^{ころ}んでいるスノーを、首筋からわしゃわしゃと撫^なでまわす。お
腹^{なか}も半ば乗り上がって撫^なでると、スノーが嬉^{うれ}しそうにコロコロと転がりだした。

そんなスノーを追いかけながら、脚の付け根や首筋の毛もかき回す。

「きゃはははは！ 楽しいの！」

俺はもふもふできて、スノーも楽しい。なんて素晴らしい！

機嫌よく振られている尻尾を手に取り強めにブラシをかけ、毛並み^{とよみ}を整えてからもふも
ふ、わしわし。うん、尻尾もたまりませんな！

最後にもう一度、丁寧^{ていねい}に全身をブラッシングして毛並みを整えると、布団の上で寝転^{ねころ}
がるスノーのお腹に背を預^{あづ}け、肉球をぶにぶにした。

「クスクス。くすぐりたいよ、アリト！」

「そうか？ スノーの肉球は、ぶにぶにで気持ちいいんだよ。今日はこのまま一緒に寝よ
うな」

「アリトと一緒に寝るの！」

「……何をやっているんだ、お前たちは」

気がつくと、アディーが木から俺たちを見^み下^おろしている。

「んー？ アデーも一緒にやるか？ 羽毛もふわふわで、触ると気持ちいいんだよな」
「……」

うん、もの凄く冷たい目で睨まれたぞ！ そんなに呆れなくてもいいじゃないか。
ガリードさんたちと一緒に旅をしたり、王都でリナさんと暮らしたりしていた期間は二
月もなかったというのに、こうやってスノーたちと野営していることが、なんだかかなり
久しぶりに感じる。

「なあ、スノー。スノーには王都でいっぱい我慢させちゃったから、明日はスノーのやり
たいことをしようか。何をしたい？」

「んー。じゃあね、スノーはアリトを乗せて思いっきり走りりたいの!!」

「わかったよ。明日は森の中だけど、スノーが好きなら一緒に走ろうな」

星々が煌めく夜空を見上げて思う。

こんな風に、スノーとアデーと何も気にせず過ごすのは気楽だ。気楽だが……オース
ト爺さんの家や王都でリナさんと暮らしていた時のことを思い出すと、少しだけ寂しい気
もする。

「もう寝ようか。スノー、アデー、おやすみ」

「おやすみな、アリト」

「……ふん」

とりあえず今夜は、スノーの温もりを傍で感じながら何も考えずに寝よう。
スノーのもふもふに包まれ、目を閉じた。



外で迎えた朝は久しぶりだが、いつも通り夜明けとともに起きて朝食を済ませた。

「よしスノー、走ろうか。疲れたらのおんぴり葉草でも採ろう」

リナさんが告げた待ち合わせ場所は、王都から街道を歩いて二日の距離のオルド村だ。
リナさんが王都を今日出たとしても、合流するのは二日後以降になるだろう。

多少のおんぴりしてリナさんに追い抜かれても、アデーに空からリナさんの位置を確認
してもらい、スノーに乗って走って向かえば問題なく合流できるはずだ。

だから少なくとも二日間好きにできる。今日、明日はスノーの要望を聞いて、ゆっく
り過ごすことにしよう。

「わーい！ アリト、乗ってー！」

「街道の方へ行っちゃダメだぞ。森の中だけだからな」

ナブリア国の北にはアルブレド帝国があり、その国境までは平原もあるが森が点在して
いる。さほど広くないいくつかの森を越えた先には深い森——ミランの森があり、それを

抜ければアルブレド帝国だ。

ナブリア国の王都から延びる街道は、その点在する森を迂回して北へと向かう。だから、北へ真つすぐ進んで森を突っ切れば、国境付近のミランの森にも早くたどり着くというわけである。

『きゃははははは！』と、楽しそうに走ったり跳ねたりするスノーの背で、俺はもふもふの毛並みにまたがってしがみつつき、風魔法で落ちないように制御する。

いつ魔法の制御が乱れて落ちるか、かなりスリリングではあるが、スノーのもふもふに埋まるのはとても気持ちがいい。

森の中では、あちこちから鳥がバサバサと飛び立ち、動物はドタドタと逃げ回っている。ついでに魔物っぽいのを、さつきスノーが走りながら撃っていた。森は大騒ぎだ……。もし森に討伐ギルド員がいたとしても、俺たちのことは見られていないと思いたい。

さすがにスノーが走ったせいで街道へ魔物や動物が行ったら困るので、なるべく森の奥へ奥へと追い込むようにした。

スノーには一月以上も窮屈な思いをさせていたから、まずいとは思っても止められなかったのだ。

結局スノーが満足したのは、オルドの村などとつくに通り越した、いくつ目かの森の奥だったけどな。

比較的深い森で、葉草に含まれる魔力が高く、リナさんのお土産にもなるので夕方まで採って回った。

スノーも思う存分走った後だから、ご機嫌で尻尾をブンブン振りながら手伝ってくれたぞ。

その日も森の中で野営をした。魔物が多いはずの森の奥でも、あれだけスノーが走り回った後なので、静かなものだったよ。

次の日は、起きたらすぐにアディーに様子を見に飛んでもらった。

王都を出た街道でリナさんを発見したとのことで、待ち合わせの村へ向かって葉草を採りながら戻る。まあ、スノーがまだ走りたそうだったから、近くの森まで乗って行っただけだな。

その間に、翌日到着予定だとリナさんの従魔のモランが来てアディーに伝えたので、村近くの森でその日も野営をした。宿に泊まってまたスノーに窮屈な思いをさせるよりも、外のほうがのびのびできていいと思ったからだ。

もちろん、野営の間はたっぷりスノーをもふもふしたぞ！ 大きなスノーのお腹の上に寝そべり、全身を使ってな！



「リナさん！ こっちです！」

「アリト君、待たせてしまってごめんね」

リナさんとオールドの村で無事に合流したのはお昼前のこと。

野営の道具を片付けた後、俺たちはのんびり採取しながら村に入って待っていた。よろず屋で薬草を売って、初めて見る野菜があったのでそれも買ってある。

「気にしないでください。またよろしくお願いします。待っている間にこちら辺の森の薬草は集めておきましたよ。おすそ分けしますね。これから街道から外れて、森の中を野営しながら北へ真つすぐ進んでも大丈夫ですか？」

「ええ、いいわよ。私はちよつと村で買い物してくるわね。終わったら出ましようか」

「それなら肉や野菜はあるので、パンをお願いします。昼食も森で作りますよ」

「わかったわ、ありがとう。じゃあ、パンだけまとめて買ってくるわね」

リナさんの買い物が終わるのを村の出口で待ち、合流してから出発すると、街道を外れて北の森へと向かう。

「貴族たちのことは大丈夫でしたか？ こちらは待ち伏せされましたが、森に入っただけで撒きましたよ」

「ああ、あのあと門で見張っていたら、閉門する頃に騒いでいたわ。ガリードが顔を覚えて、張り切ってギルドへ通報に行ったわよ。気にしないで。私たちは貴族関係の対処の仕方ばかりわかっているもの」

ガリードさんたちも、門で何かしらの騒ぎが起こるだろうと予測して見張ってくれていたのか。

「後で皆さんにはお礼の手紙を送りますね」

「ええ、そうしてあげたら喜ぶわよ。それにアリト君にはこのカバンも貰っちゃって。良かったのか？ これ」

そう言っただけでカバンを開き、腰につけているカバンを見せてくれた。

「旅の支度をするのに助かるから、早速使わせてもらったのだけれど」

マジックバッグが知られた時の騒ぎを、気にしてくれているのだろう。カバンに使われている革の魔力濃度の高さも、見る人が見ればわかるものな。

「いいんです。今のところ公にする予定はないですけど、リナさんたちなら、悪いようにはしないでしょう？ それに、誰が使っても容量が増えるというわけではなく、まだ完成品とはいえませせんし。ああ、お昼を食べながらも、もう少し詳しい使い方を口頭で説明しますね」

あの時は時間がなくて、渡すことしかできなかったからな。使い方を書いた手紙は入れ

ておいたけど、改めて説明したほうがいいだろう。

とりあえず森へ入ったところで、昼食の準備を始めた。リナさんの前で今さら取り繕う必要はないから、カバンからコンロや材料を取り出して、スープを作って肉を焼いた。もちろん、調味料も使い放題だ。

「できましたよ。食べましょうか」

スープと肉をお皿に盛り、リナさんが出してくれたパンと一緒に食べる。

「やっぱりアイト君のご飯は美味しいわー。あの後、ナリサさん、アマンダさん、ウエインさんがアイト君に貰った調味料を使って夕飯を作ってくれて、ちゃんと美味しくできたの。でも、アイト君のご飯が一番美味しいわ」

ガリードさん、ノウロさんの奥さんと、ミリアナさん——ミアさんの旦那さんで早速作ってみてくれたのか。

「ありがとうございます。美味しいって食べてもらえると、作った甲斐がありますよ」

食事を終えて手早く片付け、お茶を淹れて一休みしながらリナさんと話す。

「そのカバンはリナさんの魔力を通して続けて馴染ませれば、どんどん魔力濃度が増えて容量が増えますよ。それから、カバンに生物をしまう時は、魔力で包んで入れると長持ちします。取り出す時は、その魔力を頼りに探すんです」

お手本として、リナさんの目の前で自分のカバンにいつものように魔力を通して見せた。

最初は取り出すのにもコツがあるが、慣れれば大丈夫だろう。魔力操作に熟練していないと容量を広げるのは難しいので、魔法が苦手なガリードさんのカバンはそれほど拡張しないだろうけどな。

魔力結晶を使うという改良をしたおかげで、リナさんたちのものは最初からカバンの大きさの五倍くらいの物が入られるようになっていた。

「ふんふん、なるほど。そうやって魔力操作の要領で使うのね。凄い魔力濃度の革でできたカバンだったから、手紙を読んで驚いたのよ」

「そのカバンに使っているのは、リナさんたちなら倒せるだろう魔物の革です。だから持っけていても、目立つことはないでしょう。いざという時に大荷物だと大変なので、役立っててもらえればいいな、と……」

「ありがとう、アイト君。あなたの想いは十分伝わっているわ。こんな凄い物、逆に貰いすぎだと思っくらいよ？ ねえ、アイト君。本当はあのくらいの貴族のごたごたなんて、自分でどうにでもできたんじゃない？」

リナさんたちなら、カバンに使われている革やこれまで出した食材から、俺が『死の森』の近辺から出てきたのだと推測できるだろう。

だとすれば、上質な素材を持っけていても売ろうとはせず、ただ薬師見習いとして商人ギルドに登録しただけ、しかも『死の森』で生きる実力があるのに討伐ギルドとは関わらう

としない、という俺に疑問を持ったはずだ。

考えてみると、これはいい機会なのかもしれない。気を遣って聞いてはこないと思うけれど、リナさんはエルフだから、間違いない爺さんのことを知っているだろうしな。

「そうですね。多分、俺が持っている物を使えば解決したでしょう。でも前にも話した通り、街に出たのは今回が初めてですし、実際にそれがどこまで影響力を持っているか知らないのです。爺さんから貰ったもので。でもリナさんなら、丁度いいのかもしれないですね。これを見てもらえますか？」

そう言つて、カバンから爺さんが用意してくれた身分証明書を取り出し、リナさんに渡す。

『アリト・エルグラード』の名で、エリダナの街で発行された身分証明書を。

「こ、これはっ!!! ……そう、なの。アリト君を育ててくれたお爺さんって」

身分証明書の姓を見たリナさんは、目を見開くと同時に驚きの声を上げ、それから震える声で呟いた。エルグラード、と。

リナさんの反応から、どのくらいの影響力があるか確認しようと思つたのだが。

「オースティント・エルグラード、なのね？」

ああ、やつぱり。爺さんは大分前に隠居したと言つていたが、今でも世間ではかなり知られている名なのだ。さて、リナさんからどんな話が聞けるのやら。

まだ驚きに震えているリナさんを見ながら、爺さんのことを思い出す。

「やはり、リナさんはオースト爺さんのことを知っていましたか。…爺さん、オースティントでオーストだったんだな」

オースティント・エルグラード。それが爺さんの本名か。

「え、ええ。確かにこれを国の上層部へ見せれば、あんな男爵の嫡子なんて目じやないくらい大騒ぎになるわよ？ どの国で出しても、ね。…まさかアリト君が、あのオースティント・エルグラード様に育てられたなんて。エリンフォードでは、知らない人はいない名前よ」

爺さんも、『僕の名前はの、ちいとばかり、どこの国でもはったりが利くでの』って言つていたしな。規格外な爺さんの「ちいとばかり」は、やはり凄かった。

「では、そのエリンフォードで誰もが知っているオースティントの逸話を教えてくれますか？ 俺にとつては、恩人だけど辺鄙なところに閉じこもっている、変わった爺さんでしかないの。まあ、色々なことの師匠でもあるんですけどね」

そう。ちよつとだけ楽しみにしていた、爺さんが自分では語らなかつた過去。黒歴史もあるんじゃないかと期待して、いつか聞いてみたいと思つていた。

「そ、そうね。でも、この話が本当かどうかはわからないわよ？ 私にとつても逸話の中の人って感じなのだから。じゃあ、少しかだけ話すわね」

そうして語られたのは。

オースト爺さんはかなり昔から生きていて、今ではエリンフォードでも少ない、原初のハイ・エルフと呼ばれる一人であるということ。

エルフの起源は霊山であり、原初はそこで生まれ、暮らしていたという。

だが、それから長い年月が経ち、今ではほとんどのエルフが霊山ではなく、麓の森や街などで暮らすようになった。

そのうちに、同じエルフでも、ずっと霊山や森の中で生きてきた者と、街で生まれた者として保有魔力や寿命に差が出てきた。

今では、リナさんのような寿命が三百年くらいのエルフがほとんどだそうだ。

ハイ・エルフと呼ばれる人たちで、今も生きているのは二十人くらいだろうと言われている。その中でも特に有名な三人のうちの一人が、オースト爺さんだ。

他の二人のうちの一人はエリンフォードの初代国王で、現在は霊山に隠棲しているとのこと。もう一人はエリダナの街を造った元領主だそうである……。

その元領主って、絶対、爺さんが紹介状を書いてくれた相手だよな？ 今のエリダナの領主は、当人ではなく子孫が務めているらしいけれど……。

その人は色々なものを発明することで有名で、領主の地位を譲ってからは本人が表に出ることはほぼないが、作品は世に出ているそうだ。

そして、肝心のオースト爺さんなのだが。リナさん曰く、大勢の強大なる従魔を連れて世界中のありとあらゆる場所を回っていたため、各国にエピソードがあるのだという。

オースティントなら従魔を従えて一人で国さえも落とせる、と恐れられているそうだが……まあ、あの家にもふもふ天国だったよな。それも、かなり強い魔獣ばかりの……。

そこまで聞いたところで、後は夜にゆつくりということになった。今の話だけで結構驚いたから、俺も少し消化する時間が欲しい。

リナさんも俺がオースト爺さんの養い子兼弟子だと知ってかなり動揺していたので、落ち着く時間が必要だろう。

午後は森の中を、街道の進路とは関係なく、アディーとモランに案内してもらって歩いた。

葉草や野草を採りながらのんびりと、だ。

何も気にせず森の奥へどんどん入っていく俺たちに、リナさんは驚いていたが、いくら進んでも魔物どころか動物の影もない。

……昨日スノーがはしゃいだせいで、魔物も動物も逃げてしまったのでしよう、なんてリナさんには言えないがな！

「不思議ね。こんなに森の奥地へ入っているのに魔物がいないなんて……。アリト君はそ

の場にいなかったけれど、ウェイドの街で、私たちは討伐ギルドマスターに警告したのよ。最近、魔物が活性化している疑いがある、とね。アリト君と出会った当時、私たちはイーリンの街近くの森の調査と魔物討伐の依頼を受けていたの。実際に討伐した魔物の数もかなり多かったわ。その上、ウェイドの街に行くまでの山越えでも魔物が出たでしょう。だからこの国一帯の森の魔力濃度が上がって、魔物の発生率もかなり上がっていると推測しているの。それなのに、この森には全然魔物がいないわね」

昨日スノーが走りながら魔物を轢いていたが、確かに言われてみれば王都に近いわりには魔物の数が多かった気もする。俺はしがみつくのに必死で、あまり見ていなかったが。

「ま、まあ、ほら、スノーとアディーとモランまでいますし、魔物も恐れて近づいてこないんじゃないですか？俺も旅に出てから森で野営していて襲われたことがなかったですし」

うん、言えないよな……。ただでさえ、さっきオースト爺さんのことで動揺させたばかりだというのに。リナさんなら、スノーの種族も察していそうだけれど……。

不審がっていたが、とりあえず納得してもらって、その日は森から少し外れた場所野営をすることにした。

木の枝や石をどかしてある程度整地したら、次は夕食の支度だ。

カバンからコンロと野菜と肉を出して、野菜を魔法で水洗いし、調理器具に浄化の魔法

をかける。それから鍋に水を入れて火にかけ、野菜を切った。

「アリト君は本当に流れるように魔法を使うわよね。生活魔法でも、普通は毎回意識して魔力操作してから使うものよ。それもオースティント・エルグラード様の教えのおかげなのかしら？」

「あー、魔力操作は最初に徹底して叩き込まれましたよ。咄嗟の時でも魔法をすぐに使えるように、と。あとは、オースト爺さんが色々な魔法を見せてくれたので、そこから自分でイメージをして使っています。爺さんは何を聞いても答えてくれましたしね」

この世界には、生活魔法などの日常でよく使う一般的なものを例外とすれば、特に決まった術式や魔法というものはない。自分のイメージ次第で、魔法の効果を変えられるのだ。

魔力操作の特訓をした俺は、ある程度自由に魔法が使えるようになっていた。

「それにしてもリナさん、オースト爺さんのことはやっぱり『様』付けなんですか？」

「だって、畏れ多いわよ。私からしたら、それこそ伝説の人という感じで……。ごめんなさい、アリト君にとっては一番身近な人よね。……それじゃあアリト君との会話では、せめてオースト様って呼ばせてもらうことにするわ」

そう言っ、リナさんは笑みを浮かべた。

「でも、魔力操作を最初から徹底的に訓練して、魔法を見せて学ばせる、というのはいかな

り有効な教え方かもしれないわね」

確かに、この世界とは違う常識や科学の知識がある俺のイメージ力は、チートだと思う。だが、こうして構えることなく魔法を使っているのは、爺さんが魔法を使うところを傍で見たいってのも大きいんだよな。

「あ、そうだ。モランもスノーやアディーと同じご飯を食べますか？　いつもは自分で好きなものを狩って食べているのかな、とも考えたのですが」

そういえば王都までの旅の間も、モランが夕飯の時に一緒にいたことはなかったよな。

「私はモランが欲しいって言った時に用意するくらいで、普段は自分で狩っているのよ。

モラン、どうする？　アリート君の言葉に甘える？」

「ピーイツ」

「うん、わかった。アリート君、じゃあ今日はモランも貰っていいかしら。食べてみたいって言っているわ」

それを聞いたアディーが、苦々しそうに念話で言い放つ。

『生意気なっ！　自分で狩れるなら、辺境か『死の森』まで飛んで行かせればよかるうに』

「アディー、そんなこと言わないの。なんでそんなにモランに突っかかるんだ？　何かあったのか？」

「……ふん。何かなんてあるわけがないだろう。もういい」

パイッと顔を背けて、アディーは夜の森へ飛んで行ってしまった。うーん、本当はどうしたんだろう。鳥型の魔獣同士で何かあるのかな。

「あ、アディー！　ご飯、出しておくからちゃんと食べるよ！」

遠のくアディーに声をかけると、揉めていることを察したりナさんが心配そうに言う。「あら、無理しなくていいのよ。モランも普段は狩って食べているんだし」

「いえ、気にしないでください。アディーは気難しいんですよ。では、はい、これ。スノーたちは、ちよつと火で炙った肉がお気に入りなんです。食べてみて、モラン」

今回の肉も『死の森』の魔物の肉だ。

炙った肉をスノー専用の皿に載せてスノーの目の前に出し、同じ肉を別の皿に少し載せてリナさんに差し出した。アディーの分の皿も、スノーの隣に置いておく。

モランも見た感じ弱くはなさそうだし、エリンフォードの森の奥に棲む魔獣なのだと思う。だから、たまには魔力の濃い肉を食べたいだろうと考えたのだ。

「さあ、リナさん。俺たちも食べましょう」

モランが美味しそうに肉にかぶりつくのを見ながら、俺たちもお皿を並べて食べることにした。

「ありがとうございます」

食後はお茶を飲みながら、爺さんの話やエリンフォードの話のリナさんから聞いた。聞きながらスノーにブラシをかけてもふもふしていたら、リナさんも我慢できずに撫でていたぞ。そして、スノーの毛並みに蕩けていた。うちのスノーはいいもふもふなのです！

寝る時になって、もうカバンの容量を隠す必要はないから、俺はリナさんに自分の布団を貸すことにした。布団に丁寧な浄化をかけてからリナさんに渡す。

俺はスノーに少し大きくなってもらい、お腹に寄りかかって一緒に寝ればいいからな。やっぱり地面に毛布一枚敷くよりも、ずっと快適だ！ まあ、スノーには少し負担をかけてしまうけどね。

リナさんは布団に横になると、ふわふわ感にとっても驚き、目をキラキラさせていた。ちなみに、リナさんはスノーが大きくなったのを見ても、ため息をついて俺を見ただけで、何も言わなかったぞ。

あとはいつも通りに、念のため結界の道具を埋めて就寝する。ここら辺の森では、スノーがいれば魔物や獣に襲われることはないだろうけどな！



その後も十日ほど、森を迂回することなく北へ真つすぐ進んだ。爺さんの知り合いがいるミランの森まではあともう少しだ。

街道にある四つの村と一つの街を通らずに到達することになる。道中で採集した薬草もかなりの種類と量になり、俺とリナさんも満足だ。

十日の間に魔物や動物に何度か襲われたが、大して強くもなく、リナさんとスノーたちとであっさりと倒した。

まあ、目的がミランの森と言っても、それなりの広さがある。爺さんがくれた紹介状の相手は森の中の小屋に住んでいるという情報しかないので、着いたら最初にアディーに探してもらおう。

爺さんが変わり者と書くくらいだから、きつと森のかなり奥の、誰も立ち入らないような場所に住んでいるのだろうと予測している。

旅の間に、リナさんから爺さんのことを色々聞いた。リナさんは、ずっと昔のことだから誇張されて伝わっているかもしれないと言っていたが、まあ、俺も物語か何かを聞いているみたいだな気分だった。

前回少し聞いた話も含めてまとめると、霊山の奥深くの集落で生まれた爺さんは、霊山を下りて世界中の辺境地を巡っては従魔を増やしていったらしい。その旅を続ける中で、

従魔や爺さんの力と知識を手に入れようとする国の上層部に狙われることも多々あった。爺さんは戦ったりピンときたりしたヤツと従魔契約を結んだそうだから、その戦いの規模が国の上層部に伝わるくらいに激しさだったに違いない。それで目を付けられたんだな。あの家にいた従魔たちは、強力な魔獣ばかりだったし。

国に狙われるたびに爺さんは暴れ、相手がよほどひどい対応をした時には城や施設を半壊させたりして、どの国でも恐れられていたそうさ。

まあ、やりたい放題だな！ でも、爺さんなら国からの干渉には徹底的に抗っただろうことは容易に想像できる。

人前に姿を現さなくなり、噂も聞かなくなってもう百年以上は経っているが、オースティント・エルグラードはハイ・エルフだつていうのも知られているから、今でも爺さんを求めている国はあるという。

なんかここまで来ると、爺さんの知り合いに会うのが楽しみになってきたぞ。全員一筋縄ではいかない相手だろうが、そんな爺さんと付き合っている人物なら面白そうだし、彼らから聞く爺さんの話も凄く楽しみだ。

爺さんに変わり者とまで言われる相手は、さて、どんな人だろうな？

第三話 ミランの森の隠者

ミランの森は、北はアルブレド帝国の国境手前まで、東はエリンフォードとの国境である山脈の手前までと、かなりの範囲に広がっている。

『死の森』のような辺境とまではいかないが、奥に行くにつれて魔力濃度は高くなり、貴重な薬草が生えているらしい。

だからリナさんはエリンフォードに帰省する際、時間に余裕があればミランの森に寄るそうさ。

「この森の奥へ行くと、大陸北部の魔力濃度が高い場所にしか生えないミラール草とリリーサの花が採れるのよ。今の時期は、他にも貴重な薬草があるの。せっかくだからたくさん採りましょうね！」

「はい！ 頑張ります！」

爺さんの研究小屋には様々な薬草が保管されていた。どこにでもある薬草はむしろ少なく、貴重な薬草のほうに充実していたように思う。

とはいえ、そんな貴重な薬草を使う薬の作り方は、俺は習っていなかったのだが。

当然、ミラール草とラリーサの花を使った薬の作り方も知らないが、だったらそのまま売りに出しても、オースト爺さんに送っても、リナさんに作り方を聞いてもいい。使い道はあるのだから、張り切って探すとしよう。

尋ね人の住む家をアディーに空から搜索さくさくしてもらいつつ、葉草を探りながら森の奥へ入っていく。スノーも魔力の濃い森が嬉しいのか、軽い足取りで歩いていた。

『おい、見つけたぞ。アリトが予測した通り、森の奥にわかりづらいが小屋があった。アリトたちのいる場所からだとは結構な距離があるから、今日中に着くのは無理だな』

『ありがとう、アディー。じゃあ今晚野営できそうな場所に案内してもらえるか？』

さすがに森の奥まで来た今は、スノーには葉草を探すよりも警戒を頼んでいた。

だが魔力濃度が高いといっても、『死の森』ほどではないので、俺たちでも交代で夜番をすれば野営は可能だろう。

「リナさん、アディーが目的の小屋を見つけたようです。ですが今日中にはたどり着けないそうなので、野営できる場所まで案内させます。今晚は交代で夜番をしましょう」

「わかったわ。アリト君にスノーちゃん、それにアディーとモランもいるものね。私もここまで深くこの森に入ったことは、パーティでも数えるほどしかないけれど、交代で警戒すれば野営しても大丈夫よね」

森に入ってから様々な獣や魔獣の気配を察知しているが、俺たちを警戒しているのか、

まだ襲撃しゆうげきされていない。

夜には襲撃があるかもしれないが、そこはスノーとアディーに協力してもらえば対処できるだろう。

アディーの道案内に従って森を進むと、位置的には少し東へずれて戻ったところに、野営に適した開けた場所があった。

「スノー、どう？　ここら辺に獣や魔獣はいるかな？」

『こっちの様子を窺うかがっているのはいるよ。でもスノーの気配のおかげで、今は来ないみたい』

「わかった。じゃあ料理をするのは止めておくか。すみません、リナさん。ハーブティーと昨日作っておいたパンもどき、それと干し肉でいいですか？」

「もちろん。それだってこんな森の中で食べるには十分贅沢ぜいたくよ？　じゃあ、食事を用意してくれている間、私は野営の支度をしているわね」

リナさんが整地してくれるのを見ながら、俺は薪たきぎを組んで火をつけ、コンロを出してお湯を沸わかかす。夜番に火は必要だ。

「ちよっと見回りがてら、結界を張ってきます」

「私もモランを呼んでおくわ。アリト君も気をつけてね」

「はい。行ってきます」

カバンから魔力結晶を取り出し、地面に埋めていく。今晩は数を増やして、六角形になるように配置した。

『アリート！』

こちらの様子を窺っていた猿系の魔物たちが、スノーの警告と同時に一斉に死角から襲いかかってきたが、瞬時にスノーが風の刃を放って対処した。

それを視界に収めながら、俺は素早くカバンから弓を取り出し、風の魔力を込めて射る。そのまま振り返ると、後ろから襲いかかろうとしていた魔物にすぐさま風の刃を放った。残った最後の魔物は、スノーの放った風の刃で右腕を失い動きが止まったところで、スノーに首筋を噛み切られて絶命した。

「まだいるか？」

『うん。今を見て逃げてったよ。多分もう来ないと思うけど、スノー、夜の間は大きくなって警戒するの！』

「ありがとう。じゃあ今晚も俺と寝ような。警戒に何か引つかかったら、ちゃんと起こすんだぞ」

『うん！ わかったの！』

仕留めた猿系の魔物をその場で解体し、手早く血の浄化で消してから残りの魔力結晶を埋める。全ての作業が終わったところで、野営場所に戻った。

「凄いわね、アリート君。魔物が襲ってきたけど、すぐにアリート君とスノーちゃんが倒したって、モランが教えてくれたわ」

「いえ、俺は別に。スノーがいれば不意打ちはされませんしね。モランはこの肉食べるか？」

襲ってきた奴らは、『死の森』でいうとかなり浅い場所が出るくらいの魔物だろうから、スノーとアディーには物足りないと思う。

『ビィッ！』

「わかったわ。ただけるかしら？ 今晩はここでずっと私と一緒に警戒してくれるらしいの」

「モラン、ありがとうな。では、この肉を。俺たちも食事にしましょうか」

食事が終わった後、前半の夜番をリナさんに任せて寝ると、夜半にアディーに起こされて交代した。

番をしている間は、俺と一緒に起きたスノーをブラッシングしたり、もふもふしたりしていたぞ。アディーは呆れて偵察してくるって飛んで行ってしまったがな！

結局、夕食前にあっさり魔物を撃退したからか夜に襲撃はなく、ひとまず安全らしいと判断した俺は、スープを作ってパンを添え、朝食にした。

「リナさん、今日はアディーが見つ付けてくれた小屋に行きますが、それでいいですか？」

「ええ。私が奥へ行きたいと我儘わがままを言っついできたのよ。ここまで来ると、もう私一人では森を出られないと思うし、一緒に行くわ。もし、その人が私と一緒にではダメだと言うなら、一度森の浅い場所まで引き返すことになってしまいかもしれないけれど……」

「うーん、爺さんの紹介状があるし、多分大丈夫だと思えますよ。では、行きましようか。いざとなったら、ちゃんとエリンフォード近くの安全な場所まで送りますので」

「ありがとう、アリト君。スノーちゃんもよろしくね」

「わかったの！ スノー頑張るの！」

「ふふふ。スノーが張り切っていますよ。せっかくですし、今日も採集しながら行きましようか。スノーには周囲を警戒してもらって、アディーとモランには空からの警戒と偵察をお願いしましょう」

「ええ。そうね」

たまに襲ってくる魔物を倒しつつ、採集しながら森を奥へ奥へと進み、昼を過ぎてアディーにもう少しだと声をかけられた頃。

ふと耳に何かの音が響いた。

「ん？ 何か聞こえないか、スノー」

「んんー？ あ！ あっち！！ あっちの茂みしげから鳴き声が聞こえるの！」

「鳴き声、か。獣かな？ スノー、敵意はあるか？」

『ううん、ないよ。多分、赤ちゃんじゃないかな？』

「え、赤ちゃん？ なんでこんな場所に？ ちよつと行ってみようか」

リナさんにも断りことわを入れ、気配を消してそつと茂みの方に近づいて覗き込む。そこには――

「みゅー、みゃうー」

茂みの中でうずくまつて鳴く、一匹の子猫に似た獣がいた。毛は全体的に濃い灰色をしているが、尻尾と手の先は白い。

「ね、猫、か？ それとも豹ひょう？ ネコ科の子供だよな」

「んー？ なんか変なの！ 気配と匂いが魔獣のような獣のような？ わからないの！」

「何だ、それ。……でも、魔物ではないんだよな？」

「みゃうー！ みゃおうーー！」

思わず出してしまった俺の声に、その子猫（？）が反応して顔を上げ、こちらを見ながら激しく鳴いた。かなり小さいけれど、目が見えているのか？

「ど、どうしよう？ こんなたつちやい赤ちゃんが、なんで森の奥に一匹でいるんだろう」

「ねえ、アリト。あのね、なんかこの子がね。一緒に連れて行っついで言っている感じがするの。近くに親がいる気配もないし、多分連れて行っても大丈夫なの！」

えええっ！ そりゃあ連れて行っていいなら、喜んで抱っこしていくけど！ というか、抱っこしたくてうずうずしているけれど！

『アデイー。この子の親って空からも見えないかな？』

『そんな妙な気配のものは、この辺りにはいないな。気になるのなら、敵意がないのだからスノーが言ったように連れて行けばいい。どうせもうすぐ目的地だ』

『……そうだな。わかった。そこに住んでいる人に聞いてみれば、何かわかるかもしれないし。アデイー、案内してくれ』

少し離れた場所で待っていたリナさんは、気になったのか、俺の隣に来て茂みを覗き込んだ。

「アリト君、どうしたの？ え、猫？ いや、でもこんな場所だし、魔物なのかしら」

「それが、スノーたちにもわからないみたいなんです。でも敵意はないようなので、連れて行ってもいいですか？ 近くに親も見当たらないから問題ないと思います」

「ええ。アリト君がそうしたいなら。もうすぐ着くのよね？」

「はい。では、ちょっとこの子に近寄ってみますね」

茂みの中に分け入りゆっくり手を伸ばすと、「みゅー」と一声鳴いてペロっと俺の指を舐める。

そのまま俺は、猫(?)の身体を両手で包み込むようにそっと抱き上げた。

ふにやふにやの感触とほのかな温もりに、顔が自然とほころんでしまう。

「か、可愛い……」

「みゅー、にゅー、にやうん」

よたよたと顔を上げ、俺を見つめてコテンと首を傾げた仕草に、ドキユンと胸を買かされた。

「こ、これは破壊力満点過ぎるっ!!」

「可愛いわねー。ちっちゃいわっ！」

みゅーみゅー鳴くその子を、うつとりとリナさんとともに眺めてしまった。

『おい、アリト。まだ森の中だぞ。捕まえたのならさっさと歩け。警戒を忘れるな』

「はっ！ そうだった！ ごめん。ありがとう、アデイー。スノー、行こう」

ここが魔力の濃い森の奥だということを、すっかり忘れていたよ。

両手が塞がったまま森を歩くのは危ないので、カバンから細長い布を取り出して子猫を包み、布の両端を俺の首の後ろで縛った。抱っこ紐代わりだ。

これなら、いざという時に弓は無理でも魔法を使うことはできる。

「いいわね、それ。じゃあ行きましょうか」

「はい」

そっと片手を布に添え、子猫の身体を支えて歩いていくと、アデイーが見つけた建物が

見えてきた。

大きな木の上にある、木の枝に覆われた木造の家。

おおおつ！ 秘密基地の豪華版だ！ 俺も作ろうとしたよなー、子供の頃。

ふと、田舎の祖父父母の家の庭にあった、樹齢がどのくらいかも不明だった大きな木を思い出す。

「森に溶け込んでいるわね。霊山の麓の森の奥に今でも暮らす、エルフの家のようだよ」

「え？ じゃあ爺さんが紹介状を書いてくれた……リアーナさんって人は、エルフなのかもしれないですね」

エルフが多いエリダナの街ならともかく、それ以外で爺さんにエルフの知り合いがいるとは思っていなかったな。

「ふふふ。いいえ、違うわ。私はエルフと別種族の混血なのよ」

「うわっ！」

「きゃっ」

「グウォンツ！！」

驚いて振り返ると、真後ろに声の主だろ？ 女性が立っていた。

膝裏まである、ゆるくウエーブのかかった鮮やかな若葉色の髪。透き通る肌長い耳、切れ長の碧玉色の瞳。すらりとした容姿で、とても美しい。

スノーでも気配を察知できなかったなんて、何者なんだ？ この人。

「そんなに警戒しないでちょうだいな。貴方がオーストが拾ったっていう子ね。この子はエリルの子供かしら。エリルもラルフも元氣？ 貴方もよろしくね。そちらのエルフの若人は、お連れさんよね。とりあえず、どうぞ家にお入りなさい。今階段を出すわ」

軽やかに笑いながらその人が手を上げると、大木からすると枝と蔦が降りてきて、あつという間に階段ができた。

「ようこそ、こんな森の奥まで。私はリアーナ・ドリユー。オーストの古くからの友人よ。貴方たちを歓迎するわ。それと、その子を見つけてくれてありがとう」

リアーナさんは、俺が抱えている子猫に目を向けて微笑んだ。

展開についていけず呆気に取られていると、リアーナさんは階段を上り、家の扉を開けて「さあ」と俺たちを促す。

後ろを向いた時に、彼女の膝裏まである髪の間、葉が生えている房があることに気づいた。リアーナさんが振り向くと、若葉色の髪がふわっと広がり、日差しでキラキラと輝いて見える。

うわあ……凄くキレイだ。

「さあ、入って。エリルの子もいらっしやい。その大ききならこの家でも大丈夫だよ」

「お、お邪魔します」

中へと入ると、木の幹と枝葉や蔓で造られた内装が視界に飛び込んできて、思わず目を眩くらした。

床も壁も天井も全て、植物が自らそうなったかのように形造られている。

「す、凄い……。まるでおとぎ話の妖精の国に来たみたいだ」

「ふふふ。貴方は面白いことを言うのね。私はエルフと木の精霊族ドリアードの混血でね。この家は、そのドリアードの能力で造ったの」

俺の隣で、それを聞いたリナさんが目を見開いた。

「ド、ドリアード！ 霊山の麓の森でも、お会いしたことはなかったのに。精霊族の方に
お会いできるなんて、思ってもみませんでした」

「精霊族は、今ではほとんどが霊山の奥に引つ込んでしまったものね。エリンフォードにもほほいないわ。まあ、私は変わり者ってことよ。さあ、お茶でもいいか？ お客さんなんて久しぶりだから嬉しいわ」

どうぞ座って？ と、これまた木の枝でできている椅子を勧められて座ると、リアーナさんはお茶を出してくれた。

「あ、あの！ ありがとうございます。俺、アリトといいます。それと、こちらは俺がお世話になっているエルフのリナリティアーナさん」

「エリンフォードのエウラナ出身のリナリティアーナです。すみません、一緒について来

てしまつて。よろしく願ひいたします」

「はい、よろしくね」

そこで俺はオースト爺さんの紹介状のことを思い出し、慌あわててリアーナさんに渡す。

リアーナさんが紹介状を読んでいる間にお茶を一口いただくと、スーッと華やかな香りが鼻を通り抜けて、気分が落ち着いた。

一息ついたところで、胸元の抱っこ紐代わりになっていた布をほどいて、子猫を膝の上へと載せる。

「みゅー、みゃあうん」

か細く鳴く可愛い声に、つい手を伸ばして喉元を撫でる。すると子猫はゴロゴロと喉を鳴らして、気持ちよさそうに目を細めた。

か、可愛すぎるっ！ もう猫もたまらんな！

いやいや、スノーも可愛い。猫も犬も、もふもふは全て大好きだからな！！

「あらあら、レラルったら赤ちゃんみたいに甘えちゃって。アリト君が気に入ったのね？」
「そういえばさっき、「見つけてくれてありがとう」って言っていたよな。」

「リアーナさんのところの子でしたか。近くの茂みで鳴いていたので、つい連れて来てしまったのですが」

「その子はね、友人から預かっているの。ほらレラル。こっちに来て自己紹介くらいしな

「さい」

「うにゅう」

そつとテーブルの上に載せると、こちらを見て小首を傾げて鳴いた。ううう、可愛い。「かわいい子ぶつてもダメよ。そんな赤ちゃんの姿のままですつと過ごすつもり？」

「にゅうう……」

リアーナさんの方をちらちら見ていた子猫が、しょんぼりと俯うつむいた。

「ごめんなさいね、アリト君。ちょっとその子を、床に下ろしてくれないかしら」

「は、はい。では」

リアーナさんの声に逆さからえない響きを感じ、何も聞かずにそつと子猫を抱いて床へ下ろす。

すると子猫の魔力が高まり、光の放出とともに一気に弾はじけた。

光が収まった後に現れたのは、俺の膝上くらいの背丈せたけの二本足で立つ猫の姿。

「え、えええっ！ た、立っている？」

「も、もしかして妖精族、ですか？」

俺とリナさんは驚きの声を上げる。

まんま長靴をはいた猫だ。

でも妖精族って、こんな姿の種族もいるのか？



立ち読みサンプル はここまで

「そう、その子は妖精族のケットシーと、上級魔獣チエンダの血を引いているのよ。魔獣との混血は珍しいから、面倒事に巻き込まれないように、私が預かっているの。ちなみにこの子、こう見えてもう十歳よ？ ほら、ちゃんと自己紹介なさい」

「あ、あの。レラル、です。この姿にも、獣の姿にもなれるよ。ええと、さつきはね。なんか森が凄く気になって、リアーナにこの家から離れちゃダメだって言われていたのに、飛び出しちゃったの。そこで貴方を見かけて、気づいたら赤ちゃんの姿になっちゃってて、包んで運んでくれたの、温かった。ありがとう」

レラルは、もじもじと両手をいじりながら頭を下げた。その姿も、さつきまでの赤ちゃん子猫と変わらないくらい可愛い。

「この子はさつきみたいに獣の姿にもなれるし、大きさも変えられるのよ。子猫くらいの大きさから、そうね、そのエリルの子と同じくらいにはなれるわ」

今のスノーは大型犬より少し小さいくらいだから、意外と大きくなれるんだな。って、ああっ！

『アディーツ!! ごめん、この家の窓まですぐ降りてきて!』

「すみせんつ、すっかり紹介するのを忘れていました! この子はさつき言っていた通り、オースト爺さんところのエリルとラルフの子供で、スノーティア。スノーと呼んでください。そして窓へ降りてきたのが、ウイラールのアディーロ、アディーです。二人と

も俺と契約を結んでくれています」

スノーも家に招き入れてくれたのに、紹介すらしてなかった……。どれだけ俺は動揺していたんだ。

「ガルウ（スノーなの! おかーさんとおとーさんを知っているの?）」

俺の足元に寝そべっていたスノーがお座りの体勢になる。

「ビューイー!（アリトに風の使い方を教えてやっているだけだ）」

「ふふふ。二人ともアリト君といい関係なのね」

よろしくね、とリアーナさんは自然に手を伸ばしてスノーの頭を撫でた。

「えっ、二人の言葉がわかるんですか?」

「ええ、その子たちは上級魔獣だから魔力が高いでしょう? 私は精霊族の血の影響で、魔力が高くて知性のある魔獣とは会話ができるのよ」

「す、凄いですね!」

驚いて、俺とリナさんの声が重なった。

爺さんでさえ、契約していない魔獣との会話は自分の従魔に通訳してもらっていたのに。このリアーナさんの見た目は二十代半ばに見えるが、どこことなくオースト爺さんに似た達観を感じる。

精霊族とはどんな種族なのだろうか。王都の図書館で調べていた時に読んだ本にも、ほ